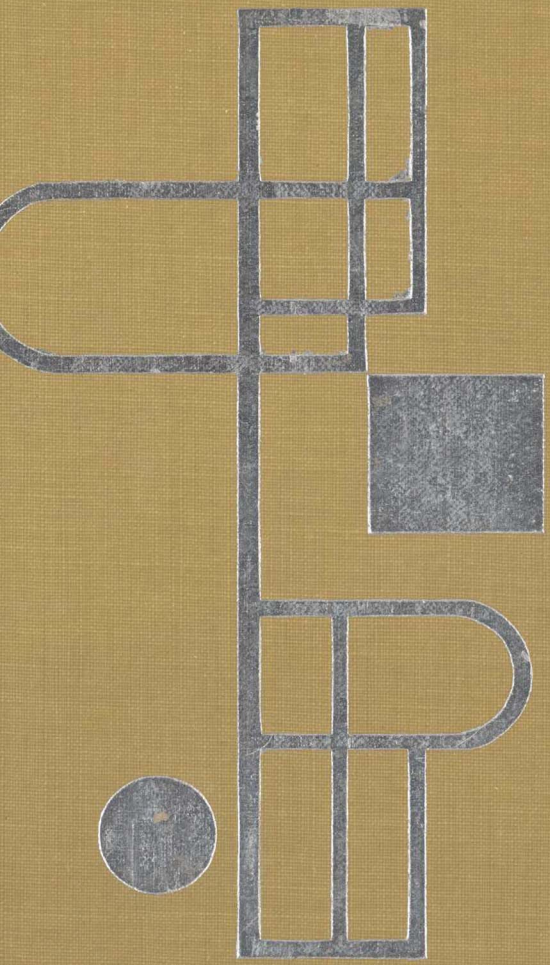
武者小路實篤集（二）



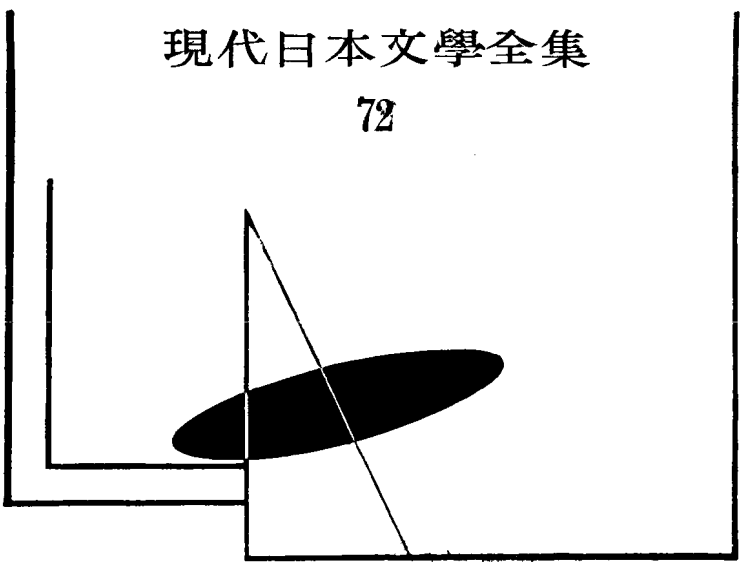
現代日本文學全集

武者小路實篤集

(二)

現代日本文學全集

72



武者小路實篤集（二）

昭和三十二年三月十日　印刷
昭和三十二年三月十五日　發行

著者　武者小路實篤（むしやこうぢさねあつ）
東京都千代田區神田小川町二ノ八

發行者　古田晁
東京都新宿區改代町二三

印刷者　多田基
東京都千代田區神田小川町二ノ八

發行所　筑摩書房
（電話）東京二九局(29)七六五一（代表）
振替　東京一六五七六八

整版　株式會社精興社
印刷　多田印刷株式會社
製本　和田製本工業株式會社

武者小路實篤集 (二) 目次

世間知らず……五
耶蘇……五七
土地……一一
第三の隱者の運命……一三
幸福な家族……二三
ある青年の夢……三〇
一日の素盞嗚尊……三九四
桃源にて……四〇三
「白樺の文學運動」(白井吉見)……四一一
解說……四二五

裴帧　恩地孝四郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

武者小路實篤集

(二)

世間知らず

園池公致兄に獻ぐ

一

C子から始めて手紙をもらつたのは五月十五日の夜だつた。よかつたら來たいと云ふ手紙だつた。

知らない女の人が來たいと云ふのは生れて始めてだつたから、圖々しい女もゐるものだと思つた。一方では又ある期待ももつた。しかしその期待は恐らく破られるにちがひないとも思つた。しかし逢ふだけは逢つて見よう、さぞ自家の奴はおどろくだらうと思つた。それが又面白くも思へた。さうして來てもいゝが豫期を少しでもつくつて來たら失望するだらう、その覺悟で來るならば火木土の内午後一時半迄に來てもらひたいと云つて返事を出した。

來るかと思つたが一週間あまり來なかつた。その間に二三度手紙をよこした。

その手紙の内にはこんなことがかいてあつた。

「私は年ばつかし大きくなりましていつまでも赤ちゃん見たいですからそのおつもりでゐて下さいまし。

私は女は大きらひです。昔のおいらんが好きです。けれども只だ姿だけ好きなんです。私は迷信家で困ります、神信心ぢやありませんの、たゞおばけだのけだものがこはいのです。そして目にちら〳〵していやでしやうがありません。人に殺されはしないかと心配で〳〵たまりません。私はきつと長いきしません。たゞ死ぬ時さぞ苦しいだらうと思へばこはくいやで〳〵たまりません。けれどもほんとは生きてゐるのは何よりいやなことですわ。

げいしやになるやうなうちに生れたらうれしいでせうとおもひます。父は私を馬鹿だと思つて見すてて居ますけれど私はちつともばかぢやないんですもの、孝行がしたくても私の眞心がとゞかないんですもの、つまらないわ、母様はかはいさうでしやうがありません、なぜお嫁にゆかないと馬鹿なんでせう。

私は泣きたいやうな氣でしゞゆう居ますけど、つまらないと思つてしゞゆうううれしさうな顏をしてゐます。人間並と人に見くびられるのはいやですから、私は、お月様のお申子で、お月様の精だとおもつて居ます。

女は大きらひ、丸い女は一ばんきらひ、くろい女もいや、長い女もいや、みじかい女もいや。私は西洋の繪の女だけ好き、活きてゐる人間はみんなきらひ。

男の人にちつとばかり好きな人がありますだけ、私は日本ですきな人に今まで逢つたことはないの、ちつとも生きてゐたくないわ。

私は利口なのに、子供の時はお悧口だ〳〵つて云はれどほしました。こんどはばかだ〳〵つてうちの者までいひます、にくらしいわね。

ごめん下さい。どうぞ私を好きになつてくださる方ならうれしうございますが。

きらひだつたらさう申してください。

私をばみんな宅の者だの伯母さんがFちゃんと云ふつもりをCちゃんと云ひますから一人か二人がCちゃんにしてしまひました。さう仰有つてかまひません」

自分はとんでもないものが舞込んだ樣に友達に吹聽し手紙を見せて笑つた。

二

始めてC子が來たのは二十四日だつた。前に二十四日に來ると云ふハガキをよこして、その日午後三時半頃C子は自分の家に來たのだつた。その日午後自分の處に高尾と長澤が來てゐた。自分は二人に今に女の人が來るかも知れないと云つた。さうしてどうせ不愉快な女にきまつてゐると口では云つてゐた。しかし美しい女かも知れない、さうあつてほしいと思つてゐた。何しろ藝者になりたいやうな口吻をもらす女なのだから。

しかし二時になつても來ないので來なくなつたのだらう、又あとで手紙でもよこすのだらうと思つてゐた。しかしくるかと思つてゐた。三時半頃に女中が來て「女の方がおいでになつて

お目にかゝりたいとおつしやります、どういたしませう」と云つた。その顏には大變なことがと云ふ色があつた。自分はわざとおちついて、「こゝへお通しおし」と云つた。さうしてどんな女か知らんと思ひながら出て見た。

自分の室はもと自家の長屋だつたので一軒はなれてゐる。出て見ると變な女が立つてゐる。西に傾いた日の光を受けて顏色のわるい痩せたヒステリーのやうな女が、髪をお下げにして、單衣の友禪のひふを着て立つてゐる、目のふちがくろく、お白粉をぬつた顏にはしみがあるやうに見えた。自分は變な非常な不愉快を感じた。しかし「歸れ」とも云へないで「お上りください」と云つた。女は躊躇してゐた。「お上りください」と自分は又云つた。女は上つた。さうして室へ入る敷居の上に坐つて自分達三人にお辭儀をした。自分は座布團を持つて來てその女の前において、

「お坐りください」と云つた。この間女は殆んど一口もしやべらなかつた。自分が何か云つても聞えないやうなかすかな聲でものを云ふか、默つてゐるかであつた。しかし自分達は、少くも自分は氣がおちつくと少し氣分の調子が高くなるのを覺えた。自分達三人は大聲でしやべつた。さうして笑つた。自分は時々其女、卽ちC子に愛想を云つた。あんまりC子がおとなしくしてゐるので少し可哀想になつて來た。その内に段々不愉快はなくなつて來た。しかしもう少し美しくつてもいゝと思つた。自分はC子の方をふりむくのを遠慮した。

高尾と長澤は餘りC子が默つて敷居の處に坐つたまゝ、座布團の上に坐らうともしないので、居ては氣の毒と思つたので何か云ひわけをつくつて歸つて行つた。自分はとめなかつた。

二人が歸つたあと、自分はC子の前の座布團をもつと奥の方に置いて「お坐りなさい」と云つた。するとC子はすぐ立つた。さうして座布團の眞中に坐つた。さうしてすんでゐない目を見はつて僕の方をぢつと見て淋しく微笑んだ。自分も淋しく微笑まないではゐられなかつた。

自分は繪を見せた。さうして「繪はすきなのですか」と聞いた。「さう好きぢやありませんの、ちつともわかりませんの」と云つた。自分は自分の知らない人が逢ひに來たがる時にはきつと繪を見にくるのにきめて、そのあつかひをするのにきめてゐた。C子はしかし默つて繪を見てゐた。左の手をついて首をのばして、僕に左の側面を見せた。西日のギラ／＼する光線はC子の右手にある障子を強く照りつけてゐた。自分は安心してC子を見つめることが出來た。のばした首から肩にかけての線の美しいのが氣がついた。顏もわりに綺麗な可愛い顏だと思へて來た。目の大きい、あごの小さい、口の可愛い、ビードロでつくつたやうな感じのする顏だと思つた。自分は見とれてゐる内にC子の頰や首すぢや喉を彫刻物をさするやうにさすつて見たい氣がした。

この時自分はふと思ひ出したことがあつた。「ロダンの展覽會の時見に來たでしよ」と云つた。

「えゝ」とC子は答へた。「山脇の繪の前の椅子に腰かけて白樺を讀んでゐたでしよ」と云つたら、「えゝ」と繪を見ながら答へた。自分は一歩進んで頰づゐをつく眞似をして見せて「かうやつて見てゐたでしよ」と云つた。C子はとぼけて返事をごまかした。

展覽會の時にC子は皆に評判された。何しろ姿も顏も目立つてかはつてゐたので、「畫かきだらう」と云ふ人もゐた。「女優にしたらいゝだらう」「女優にして氣狂ひの役をさしたらいいだらう」と云ふ人もゐた。自分は實を云ふとその時のC子には可なり興味をもつた。その無遠慮な、非常識的な、人の注意をあつめて平氣でゐるやうな處もすきだつたが、顏もすきだつた。島田がつぶれてゐて髪の毛が散つてゐるのも面白かつた。さうして何度も何氣なく見に行つた。

自分はそれですつかり興味を持ち出した。「山脇の繪はどうでした?」と聞いた。「覺えてゐません」「あんなに見つめてゐたぢやありませんか」「いゝえ、妾は繪は少しもわかりませんの」「それならたゞ見てゐるふりしてゐたのですね」又C子はとぼけてしまつた。「兄さんと一緒でしたか」「えゝ」とC子は答へた。

「僕が居たのは氣がつきませんでしたか」「いいえ、ちつとも。いらつしやらなかつたのでしよ」とC子は云つた。自分は開いた口がふさが

らないやうな氣がして一寸默つてしまつた。
　自分はもうC子には遠慮なくなんでも云へるやうな氣がした。この女なら何を云つても何をしてもすましてゐるだらうと思つた。
「齡はいくつ」と聞いたら、それには答へず「兄は二十三です」と答へた。
　C子は話しながら繪をくりかへして見てゐた。自分はC子が繪が好きで繪を見てゐるのではなく、一番自分に自信がある姿を僕に見せる爲に繪を見てゐるのだなと思つた。
　C子はゼーマンで出してゐる三色版を入れてある箱の中の繪を見ながら、
「この內の繪を戴くわけにはいかなくつて？」と云つた。
「僕にいらないのなら上げます」
「貴君がいらないのはつまりませんわ」
「いるのはあげられません」
　C子は繪を見ながら氣に入つたのがあると、「之は？」「之は？」と聞いた。自分は一々明瞭にいる奴は「いる」と云つた。いらない奴は「いらない」と云つた。C子は好きなのを別にした。その內には僕の「いる」と云つたのも入れてゐた。隨分いやな繪をいゝ方に入れたから惡口を云つた。すると好きでない方に入れた。
「貴女が好きならいゝぢやありませんか」と自分は云つた
「それでも」と云つてC子は淋しく笑つて見せた。
「之だけ戴いてよくつて」と十枚許り選んで云つた。やつて惜しいのは二三枚だけだつた。それも特に惜しいものではなかつた。皆やつてもいゝと思つた。しかし始めて來た女にさうやつてはC子の兄や、C子の友に自分が甘い奴と思はれると思つた。それで
「そんなにはあげられません」と云つた。
　C子は不平さうな顏をして見せた。しかし僕がすまして默つてゐるのを見たら、一枚その內から選んであとを匆々箱にしまつて「それなら之を一枚戴いてよくつて」と云つた。
　それはC子が始め選ばなかつた繪だつた。それを自分が「その繪が嫌ひなのですか」と云つた繪だつた。さうして「之れは戴けるの」とC子が云つた時、「あげられません」と云つた繪だつた。自分はC子の心を見ぬいた心算だつた。C子は僕から好かれてゐる證據をほしがつてゐるのだと思つた。それで承知した。
「あと白樺の舊いのと、寫眞版の繪を一枚やつた。ロダン號をほしがつたが、それは斷つた。
　C子は「今日は早く歸らないと兄に叱られますの」と云つた。しかし六時近くなつても歸らうとしなかつた。晩飯までゐられては母や女中の手まへ面白くないと思つた。それで「もう歸らないと兄さんに叱られるでしよ」と三度許り露骨に注意した。C子はやつと六時過に歸つて行つた。
　自分は何年ぶりかに女の友を得たことを喜んだ。さうして氣樂に愉快に若い女と話をしたので少し氣分の調子の高くなつてゐるのを覺えた。
　C子が歸つたあとで母は自分に女中達がC子についていろ〳〵うはさして大事件のやうにさわいでゐたことを云つた。さうして「女中が藝者が素人にばけて來たのかも知れないと云つてゐたから、Aのやうな人の處へ押しかけてくる程實意のある藝者ならおいてやつてもいゝと云つてやつた」と云ふやうなことも云つた。さうしてあんな娘を持つた親はさぞ心配だらう、あんな娘を嫁にもらふ人があるだらうか、なぞと云つた。自分はいゝ加減に相槌をうつておいた。
　自分はその晩、自家にぢつとしてゐられないので、恩地の處へ行つてC子の話を可なりくはしくしやべつた。恩地は非常に興味を持つた。自分は油を注がれないでもいゝ可減に興味をもつてゐた所を油をそゝがれて歸つて來た。

三

　翌日C子から次ぎのやうな手紙が來た。
「男の方が三人いらしつたつてほんとは私はちつともきまりなんかわるくはなかつたんですけれども、それではあんまりおてんばに見えますからわざとすましてゐました。
　けれどもあなたがいろ〳〵お氣づかひ下すつて話しかけて下すつたり、こちらへいらつしやいつて仰有つてくだすつたりします度に、涙がこぼれさうになつてありがたく思ひました。
　御兄樣のやうな方だと思ひましたけれどもあ

とであんまり我がまゝを申しましたからきまりがわるくなりました。

これは上げられないつて仰有つたら私悲しくなつて憎らしくなりました。なぜならそれまであなたはほんとにお優しくつてきつと私の云ふ事は何でもきいて貰へると思ひましたからそろそろ我がまゝを始めましたら叱られて、こはうござんしたの、それでてれかくしにみんなしまつてしまひました。もう〳〵私にあんな大人見たいに遊ばせばとてもまゐれません。私ほんとは只ぢつと坐つててかまひませんの。

兄さんは人にあんなことを云つておきながら自分が遊びにいつてしまつてまだかへりはしません。私はほんとにもつと居ればよかつたと思ひました。(僕はこゝを讀んだ時に居られてはたまるものかと可笑しく思つた)

私かくさず申します。私はあなたのお顏を見ました時涙が出ました、なぜかしらないんです、かなしくなりました。私はほんとに泣きたくなりました。お淋しさうに見えたのですもの。

あなたは私をきらひですか、御返事をください、だつてあなたはきらひな者とはつきあつて上げないつて仰有るんですから、私はあなたのお友達になれるわ。

私はむつかしいこと何もわかりませんの、ただ私は自分を人間以上だと信じてゐますから大變をかしいわ。(C子はかう云ふものの云ひ方をよくする。)

私は蛇の生れかはりかもしれないわ、私はほんとは辰年三月十日生れですから、數へ年二十一になります。

大へん子供つぽく見えませう、みんな變な顏をします。でも羊の年の數へ年十八としてゐます。なぜならさうしないと下宿の家の母さんだのをばさんがおや〳〵二十一にもなつてるくせにと思ひますから。

私が十八と云つてもほんとにしないんですから、あなたも十七だとおもつて下さいまし。

なぜ羊にまでとびましたと云へば十二支の内で辰と羊より外にいゝ年はないんですもの。

私うそをつくのはきらひですから年をきかれるとすぐびく〳〵します、だつてほんと申せば何だ、いゝ年になつてと風がうそらしく見えますから。ほんとにつらいんですからこれはないしよにしてくださいまし。

これからお友達の中で年をきかれましたら、Cちやんは羊の年の生れでやさしい子だと申してくださいまし、後生ですから。

もう私のまゐるのはおいやでございますか、私はずぼらですからきつとおきらひでせうと心配で心配でたまりません。

今日はいろ〳〵戴きましてありがたうぞんじました、うれしくつてたまりません。兄がかへりましたらさぞよろこびませう、ありがたう。九時」

自分はくり返して讀んだ。さうして自分は面白い、いゝ友達の出來たことを喜んだ、しかし又あまり馴々しく、うまいことを書くので恐ろしくも思つた。しかし自分は避けようとは思はなかつた。むしろ正面にひきうけてゆく處まで行つて見よう、深入り出來るだけ深入りして見よう、ひどい目にあつたら、どうひどい目に逢ふか逢つて見よう、自分はC子がいくら勝氣な我儘な利口な女であらうとも、女には負けないつもりでゐた。又自分にはC子を運命が自分に與へてくれた得やすからざる送り物のやうな氣もした。

自分は昨日は面白かつた、貴女を嫌ひではない、貴女には何でも云へて氣持がいゝ、來てほしいと思つた時來て呉れと云へばすぐ來てくれる氣がする。いやな時には歸つてくれと云へばすぐ歸つてくれさうな氣がする。自分は貴女と友になれることを嬉しく思つてゐると云ふ意味の手紙をかいた。しかし「あまり自家に來てもらつては困る」と書き加へるのを忘れなかつた。

それからC子とはよく交通した。さうして段段仲よしになつた。C子は恐ろしく痒い處に手のとゞく女だ。さうしてつけ上らせればいくらでもつけ上る女だ。さうして少しでもこつちがすきまを見せるとすまして其處に入つてくる女だ。そのかはり少しも氣の毒に思はずに押へつけることの出來る女だ。自分はさう思つた。さうしてその猫のやうな處が可愛く思つた。

四

或朝C子から左のやうな手紙が來た。

「私が頼りにするやうな男はまだしません、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

私が尊敬した男はまだ一人もありません。たゞ私のために世に活き甲斐のある人となる男はかぎり限りなくします。

どんな男でも私を得たら世に限りない寶をもつてゐる程誇りを持つことが出來ることとおもひます。その時私は淋しい身を思ひます、愛する男はいくらも得られます、そして私を其まゝに尊敬し愛してくれる男はいくらもします、たゞ私のすべてを被ふ男をしりませぬ。

女王のまゝに活きてゆくのは面白いでせうか、私はいらぬ氣づかひもなく私をすべて被ふことの出來る男に愛されて見たいと考へないでもありません。

正直に申します。

私はあなたを淋しい方と眺めました、淋しさうな貴君の姿を見ました。私は正直に申します、きつとあなたは私のためにすつきりと充實した幸をお求めになることが出來るとしりました。それだけを知つて私はそれ以上どうすることも出來ない世を呪ひます。

たとへ私のためによき命が與へられると知りましたとて私はその人の爲に自分を捨てることはいやです、しばらくはいゝとしてもどうせいやになります、そしてそれはだめです。

たゞ私が尊敬し愛する人のためにはほんとに苦しみます。私は昨日から何となく苦しみました。運命を想ひました。私は自殺するやうになつてるかしらと考へました。私はどうしても悲劇の主人公に造り上げられて居ります。

私、よくわかります、私はほんとにコスモポリタンなんです。

たいていの男は私を專有にしたがります、そして世に矜らうとします。私はよくそれを知つてゐます、そして私はだれの手にも歸ることを好みません。

そして私は世を呪つてゐます。

そして子供を呪ひます、氣味がわるいんです。ほんとに赤んぼはいやです、そして子供から大人になりかけの眼をみると胸がわるくなります。いや、あゝいやになつた。

お友達になりませう。

C子はぼかんとしました、いまぼんやりしました。

その代りあなたを慰めます、いゝいゝお友達になりませう。私はほんとに道樂者です、私はほんとに不思議な女です。自分にははつきりしてるんだけど人はちつともわかつてくれないんですもの。

あなたは奥さんが好きですか、氣味がわるくてもらへないでせう、およしなさいね、ほんとうに、私さうすればもう〳〵遊びにはゆきませんよ、そしてもう逢ひません。

私はあなたを私のものにしようとは決して思ひません。第一私は自分の外に一人でも自分の係累を想ふことは堪へられませんもの。自分とそして愛人とそれだけでたくさんですから。ほんとは私、山の中かほら穴にこもりたいのです、ほんとはほんとは。淋しい貴君の姿を想ひます。そして哀れないろ〳〵の男を想ひます。世の中の男はみんな動物性の女に飽きてもの哀れなうら悲しい顔をして居ます。

動物性の女は子供をこしらへるより外は何のこともしりません。私は男の人を哀れみます。そして女をにくみます。今貴君は何をしていらつしやいますか。

私はもうこの男より以上の男はないと知つた時、もう私はその男のかげから一寸も姿の表はれぬやうになりたいと考へます。

私をかくし被せる男に逢ひたい。

私、男をさがす爲にどの男にでも口をきくと思つてはいやですよ。

ずゐ分まじめなのですから、それは知つてくれませう。

おてんばのせゐでもありません、づう〳〵しいためだなんていやーなこつたわ、アバヨ」

自分はこれを讀んだ時、腹を立てた。始めの五六行でかつとしてしまつた。さうしてアバヨと云ふ言葉に胸をわるくしてしまつた。とんでもない女に逢つたものだと思つた。それで自分は十二行二十五字詰の原稿用紙にうんと上手に出た自分でも痛快に思つた程わる口をかいた。自分は之でもうこの女とも絶交だなと思つた。さうして面白い女との關係を破つてしまふことを惜しくも思ひ、安心もした。

自分のかいた手紙には「女なんかで生き甲斐を感じることが出來るにはお氣の毒ながら自分は齡をとつてゐる。自分は貴女より美しい女や、

ノーブルな女を知つてゐる。たゞ貴女のやうな自由な女を知らなかつた。その自由が今の自分には必要だつた。だから友達にならうと思つたのだ。しかし自分は自分を見上げることを女の友に強ひても、自分の方で女を見上げることを強ひられるのは閉口だ。自分は淋しい顔してゐるかも知れない。又淋しがつてゐるかも知れない。しかし淋しがつてゐてもそれは自分にとつて益があつても害はないのだ。自分はその淋しさから力をくみとることを知つてゐるから。又自分は貴女に生き甲斐を與へ得るとは思つても、貴女から生き甲斐を得られるとは思へない、僕はもう生き甲斐を得てゐるのだから」と云ふ意味のことを激してかいた。自分はかいてゐる内に益々興奮して來た。かき上げて郵便函に入れに行つた。さうして興奮をもらす爲に一里近く離れてゐる上野まで歩いて行つた。さうして歩きまはつた。

五

自分は十二時過ぎに自家に歸つた、少しつかれてゐた、飯を食つてからあと矢張りまだ氣がおちつかなかつた。しかし興奮は殆んどさめてしまつた。さうして先きの手紙は少し書きすぎた氣もした。さうしてそれで絶交してしまふのが惜しいやうにも思つた。C子は自分の手紙を見てどうしてゐるだらう。きつと何とか返事をよこすだらう。どんな返事をよこすだらうかと思つた。自分はC子からくる返事を心待ちにまつた。さうして少し不安になつて來た。どうなつたつてかまふものか、あの女を失へばまた新らしいもつといゝ女が出來るかも知れない。そんなことまで思つて見た。さうして疲れてゐたので午睡した。三時半頃目をさますと、女中が「速達がまゐりました」と云つて一通の手紙を持つて來た。自分はその表での字を見ると共に何げなく「あゝさうか」と云つた。それはC子からの手紙だつた。女中が去ると自分は手ばやく封を切つて讀んだ。手紙にはかうかいてあつた。

「今少し氣がおちつきましたから、一枚かきましたけれど、それはよします、そしてかきあらためることにしました。

御手紙をいきなりやぶりましたからもうよみ直しが出來ません。しつてゐます。みんなしつてゐます、ごめんなさい、どうぞ。

昨ばんねるまでいろ〳〵あの手紙を出したことについて、かいたことについて後悔してゐました、私はほんとに馬鹿です。ほんとに馬鹿です。少し上氣してゐます。私はけさのお手紙をくり返しくり返し拜見してゐましたところへあとのが來ましたので、すつかり上氣してゐます。はげしい動悸を感じます。

貴君に惡く思はれゝば私は大へん價値のない女になると知りますとき、私はたまらなくなります。

ざんこくだとおもひます。私は我がまゝより知らないんです。自分のしたことにかまはず人を恨みます。私はきつとそばに居ればかみつきます。

C子はいゝ子だとお思ひ返してください、後生ですから。そしてあなたもあの手紙をやぶいてそしてすぐC子はいゝ子ですと御返事をください。すぐ電報か速達でなければいやです。

より美しい女、ノーブルな女をしつて居りますと云はれる程つらいことはありません。なみ大ていの苦痛ではありません。私はうつくしいために、氣品のために、自分がいゝとは夢にもおもひません。けれども自分より美しい女、ノーブルな女のあることを思ふのはいやです。そしてそしてあるとは思ひません。あつたつてきつとつまりません。私は少しでもくはしく自分の立場を知らせたいとかんがへました。そしてごつちやになりました。私は正直に申します。そして私はたゞ無邪氣と我がまゝと正直より知らない子供です。

あなたを尊敬してゐるかゐないかは手紙で申したつてだめだとおもひます。そして言葉で通じあふものならつまりません。

私はあんなつまらない言葉をならべた中へ、寂しいあなたのお姿とかいてわるうございました。何のためにお寂しさうだ位はしつてゐます。

私は涙ぐんでゐました、すぐあなたとお逢ひした時涙が出ました。私は自分の感情が自然だと思ふより外にたよるところがありませんでした、今だつてありません。

その感情がきたなかつたり、けがれてゐたり、

淺はかだつたりするならもう私は世の中に活き甲斐はありません。私はあなた一人にだつて見くびられて活きてはゐられません。あなたを敬してゐたつてあなたから愛されるとか何とかでなくて私はいくらあなたがいゝ方だつてにくまれる方を尊敬してゐるのはつらいからいやです。もういゝから、もうわるく思はない決してと云つてくださいますまで私はつらい思ひをしてまつてゐます。

そしてあなたはすぐおこりつぽい人ですわ、こはい方、もう〳〵私は失禮なことは申しません。

きのふだつてそんな意味ではなかつたんですもの。

御申しわけぢやないんですけど、あれは私のかき方が大變わるうございました。

私はほんとはつらさにあきてゐます。すぐ笑ひたくなります。

ごめんなさい、私の心は一人でつらく泣きますから、もうせめないで下さい、ゆるして下さいまし、すぐゆるしてくれなければ私はやけになります。」

自分はそれを讀んだらC子がすつかりすきになつた。さうしてはね起きた。さうしてすぐ郵便局へ出かけて「アンシンアレ、クハシクハテガミ」と電報を打つた、電報用紙を掛りの人にわたす時、一寸いやな氣がした。さうして自家に歸るとすぐ「なかなほり」の手紙をかいて又郵便局へ行つて速達で出した。掛員がちがふと思つたので安心して。

するとまもなく普通ビンの手紙が來た。僕が前の手紙をうけとらない内にかいた手紙だつた。それにはかうかいてある。

「こゝの家の女の子が速達を出しにいつてうらへ名前を注意されてかゝされたさうですからきつと子供つぽい字でせう。

ものなつかしいうれしい間柄を自分の手でこはしたと思ひましたらいやになりました。

もう私は忘れます。どうぞ私を見すてないでいつまでも仲よしになつてくださいまし。私のわるいところはきつとなほしますからいゝ子供にしてくださいまし、私はほんとにいけません、いけません、もう私はわすれてしまひます。

お親しくしてくださいました、私もほんとにほんとにお親しくぞんじました、私は今日にもお目にかゝりたいとぞんじました。けれどほんとはまだすぐれなくて床に居ります。氣が立ちましたから大變わるくなりました。

私もういばらないわ。いゝ聲でうたひます、私は横笛の眞似が上手ですつて。

あなたも私に理窟を云つてはいやです、私はすぐかんじますから、知識のない頭はすぐこんぐらかります。このまゝ、このまゝ、どうぞ、どうぞ、Cちやんはそれはいけないとか、いゝとかつて妹に叱るやうに仰有つて下さいまし」

六

自分はそれから目に見えてC子が好きになつた。その時よく友にC子と喧嘩して仲なほりしたことを話して、こんなことをしてゐる内に本當に深入りしさうだと云つた。しかし未だすつかりC子に心を許すことは出來なかつた。

其後C子に逢つた時C子は「貴君の御手紙には本當の貴君が出てゐませんのね」と云つた。自分はそれに同感しないではゐられなかつた。さうして「君の兄さんにもしかして見られると困るから」と云つた。しかしそれは半分以上嘘だつた。其時分自分はC子の手紙をまに受けて笑はれはしないかと何時でも心をくばりながら手紙をかいてゐたのだつた。さうしてC子が平氣で露骨に手紙をかくのに内々恥ぢてゐたのだつた。その後まもなくC子より左の手紙が來た。

「Cちやんは朝おめざめのときほんとにむづかります、大きなおふとんの中でバタ〳〵とはねまはつてお母さまお母さまつて泣きごゑをだします、けさは糸きりばがとれた夢をみましてだれか死にはしないかと思ひましたから泣きながらなむあみだぶつ、なむあみだぶつといひましてそしてふきだしました。

私の目のさめる頃には兄さんはもう學校へまゐりましていつも一人ですから隣の室にゐるこの宅の小母さんとおばあさんがおめざめでございますかつて笑ひます。

C子はしづかになりますとしみ〴〵天下に一人ぼつちと云ふことがひし〳〵と胸にせまります。

そのときたまらなくなります。

私はこれつぽちでも天地のおきてをうけて育ちません。

私は子供の時から家庭を知りません、そして學校でよく出來ましたけれど一ケ月の半分は休みました。私の生れたときはどこへ私の籍を入れようかと母や父や母の姉やが相談しました。そして私をばK樓の長女として伯母の子につけました。

Kの伯母は世界一の美人と云つても恥かしくない程自然のまゝに、そして技巧の極みをつくしたやうな女です。そして美しい優しい露にぬれたやうな情をもつた女です。

私のやつと七つになつたとき母の子につけました。それはどうしても母がお嫁にゆかないと云つて私を離さなかつたからです、それから十五の時父の養女になりました、みんな大變出世をしたやうによろこびました。そして去年の九月又々姓がかはりました。そこでみんな私をばかにしました。

私は又籍を伯母の家へうつされました。それは私が父の姓をきずつけるのを恐れたためなんですつて。

私は姓をきらひました、私はどこの子でもありません。去年までは何でもいゝから母の子でゐたかつたのです、私生兒でかまはないと思つてました。けれどもいまではそんなことも思ひません。私は十六七の時クリスチヤンになりました。正しい神の道を仰ぎました。その時母に泣いたり、母をいぢめたりして母をおど〳〵させました。いまではそれを口惜しく思つてゐます。母をいぢめたことをほんとに殘念に思ひます、後悔します、そのために母はどんなに苦しんだかしれません。私は不幸（不孝？　C子は何時でも不幸と不孝の意味をごつたにしてゐる）ものです、母にすみません、すみません、不幸の子と思はれるためにか子供の時から我がまゝを許されました。田舍の人は私のことをみんな羨ましい中心にしてゐました。ほんとに我がまゝをしました。

母もあまり我がまゝをすぎてもう取り返しがつかないであらうと恐ろしがりました。私が今求めて不自由するのをみんな神わざと云つて恐れて居ります。みんなに妙な感じをあたへました、私は死におくれて困りました。もう死ぬわけにもゆきません、生きてゆかれるだけ生きてゆきます、苦しくつたつてしかたがありません。

急に私はあなたが頼りになりだしました。いけないことだと思ひましたけれど頼る方が出來たやうな力づよいかんじがしだしました。

ごめん下さい、決して我儘を申しませんから私のことを忘れないで下さいまし、私はすぐ涙がこぼれます。

ほんとになぜこんな心になつたかとをかしくなります。

けれども私はいつまでも小鳥のやうにいやな顏はしません。私はしづんだ色やきたない顏はいやですから。いつまでもはれ〳〵としてゐます、そして泣きたいことをうたひます。

ほんとによく考へれば私はあんまりのんきではゐられません、もう私はほんとに父から貰つたお金をなくしました、そして今月は母に少し貰つたお金と、そしてお嫁にいつたお友達が少し貸してくれたのとですごしてゐますからきつと困りだすかもしれませんから、今のうちに何とかしなくてはならなくなつてゐます。いやな田舍の人がお金をおとりなさい、おとりなさいと申しますけれど私はちつとも父をわるくおもひませんから、もう〳〵お父様やお母様へ私の苦勞はかけたくありません。そして私からきたない言葉はだしたくありません。お父様がもうかまつてくれなければ私はおさいそくはしないとおもひます、そして兄は見てゐられないものですから、心配しますから今月もお友達が貸してくれたお金と、母から貰つたのと兩方見せてこれだけ母さんが送つてくれました、そしてこれから毎月くれますから心配がないわ、うれしいわつて云つてやりましたら、兄がお前は一生お金にえんがあるんだつて申しました。そして私はだましたのがうれしくてしかたがありませんでした。

こんなことを申し上げてもよいことでしたらどうぞどうしたらいゝかをしへてくださいまし。お手紙にかゝないでくださいまし、兄はしりませんから、私はお兄様のやうに存じます、ごめん下さい、又涙がでました」

この手紙をもらつて益々C子が好きになつた。しかしC子の金に困つてゐることは親しい友に

もおくびにも出さなかつた。それを云つて自分がC子に利用されてゐるやうに思はれるのがいやだつたから。よく友から猜疑心をもつた面持で「C子さんはどうしてくらしてゐるのだ」と聞かれた。その度に「お母さんから内證に送つてくれる金でくらしてゐるのだ」と云つた。

しかし自分はその手紙の返事に少しあいまいな處を疑つたやうなことをかき加へておいた。

七

するとC子から又手紙が來た。

「何でも御存じとすぐ私は安心して終ひますと、もうすつかり御話申したやうに存じまして安心してしまひました。考へれば生れてからたつた一度お目にかゝつた方がそんなに何でも御存じの筈はないのにいろんなことをお話申してとんちんかんなことがどつさりございませう。さうして細く物を想ひますと私は泣きたくなつてしまひます。私は誰にも話したことのないことをばみんな御話してしまひました。そしてまだまだお話しない私のことがあります。そして私はいろ〳〵のことをして居ります。私は何でもないと思ふことが人には意外の事であつたり、罪と云ふ名になつたりして居ります。そんなことがうるさくつてしかたがありませんから何でも平氣にしてそして自分をごまかして居ります。

ほんとに私も利口さうでまぬけでこまります、それは伯母に申させますと世間をしらないからだ。世間を見ずに、人にもすれずにそして世間をこはがらないからこはいと申します。

どんなに私はKのお母さんがすきかしれません。お母さんよりKのおつかさんがすきでたまりません。お母さんと呼べば母がハイと答へます。(二人居るとき)おつかさんとよべば伯母がアイと答へます、Cちやんて私をよびますと私はアーイと甘つたれて答へます。母がFちやん(C子は本當の名をF子と云ふのだ。呼びいい爲にC子とかりに云つてゐるのだ)と呼びますとハイと答へます。(中略)

そして私は自分をちつとも大切に思ひませんでした。私は自分のからだも生命をもちつとも大切に思つてゐませんでしたから、生きてゐることを何よりいやと思つてましたから。

只一つ想ふことは私の感情は月よりも星よりも清水よりも清らかに美しく澄んでゐると想つてました。そして自分の感情にあこがれたり何かしてゐました。その代り私のして來たことをお話したらあなたにあいそをつかされはしないかと心配になつてたまりません。たゞ正直にいたします、そして私はほんとに無邪氣ですから、邪すゐをしないでお叱りなすつてもかまはせんからだまつてそつぽをむいてもう取りあつて下さらないやうなことになりませぬやうに、私はほんとに悲しいことに思ひますから。

そしてほんとに私何でも私のしたことをみんなお話しますからほんとにわるいことでしたらばもう〳〵あらためますから、あいそをつかさないやうにしてくださいまし。私はたゞこれを心配してゐます。

あしたどうぞお目にかゝりたうございます。新橋へまゐりまして婦人待合室に居りますからCちやんつて呼んで下さいまし、たのしみにして居ります。

ほんとうは私ね、こんなおとなしいことはちらちらと想ふばかしなんです。もうお兄さんのやうな氣がしてゐて何でも私のことに心配して下すつて、そして私をば可愛がつて下さる方だと思ひこんでしまつてゐます。

私はほんとはちつとばかかもしれません。

優しくされますとすぐ甘えたくなりますから、かんにんしてくださいまし。

私は苦勞ばかしあつて、ふとらないのつてだれにもいひますと、羨ましい苦勞ね、何の苦勞なんですかつてみんなひやかします。私はその顏を見ますとだまつて笑ひます。

しく〳〵泣いてるときなんかだあれもしらないんだと想ひだしてつまらなくなつたり、うれしくなつたりします。

あしたばかりまちます。一時半、きつと四時に出します」

八

翌月六月一日の十時に新橋に自分はC子とおちあふ約束をした。自分は九時半頃に行つた。少し早すぎたと思つたが、きまりのわるい、心細い氣をさせながら婦人待合室に見に行つた。C子はまだ來てゐなかつた。安心したやうな氣

もしたが、なほ落ちつかないやうな氣もした。自分は若い女を待つてゐるので友を待ち合せるやうな氣持にはなれなかつた。何となく氣がとがめた。自分は若い女と遠足するのは生れて始めてだ、それでなほ氣がおちつかなかつた。

自分は從妹と一緒に三崎から夜の汽船にのつて歸る時、客が多いのでぴつたり身體をくつつけてゐたことがあつたが、その時人々に見られても少しも氣がとがめなかつた。その心持になつてC子を自分の從妹の心算になつてゐればいいと思つたが、それは出來なかつた。十時になつてもC子は來なかつた。來ないのか知らん、十時半迄待つて來なかつたら歸つてやらうと思つた。自分はこんなことをするのに一番不適當な男としか思へなかつた。國府津行の汽車は十時十五分に出る。自分はそれを知つた時にそれに乘らうと云ふ氣があつた。十時に逢ふ事にきめた時、自分は十時十五分の汽車があることを知らなかつた。汽車は何時出てもいゝから十時に集らうと思つたのだ。さうして其處でそのさきのことは相談しようと思つてゐたのだ。しかし自分は何時のまにか、一人で江之島に行かうと云ふ氣になつてゐた。さうして十時十五分の汽車のあることを知つた時、おあつらへ向きの汽車があるのを喜んだ。C子も自分が存外氣がきいてゐると思ふだらうと思つた。

この日朝、雨が降つてゐたが十時頃にはすつかりあがつてゐた。人々は皆汽車にのりにどんどん改札口から入つてゆく。五分すぎになつてもまだC子は來なかつた。十分過になるとベルが人の氣をいらだたせるやうになつた。この時おちつかない自分は遠慮しながら新橋の正面の入口の石段の上に立つて來る俥を一々注意してゐた。すると一臺の俥がかけて來た。見るとC子がのつてゐる。自分は赤面した。俥夫は梶棒をおろした。C子は顏色のわるい淋しい顏をして高下駄をはいて俥からおりた。さうして自分を見て一寸微笑みながら會釋した。其處に集つてゐる澤山の俥夫は自分達を見て「わかつてゐる」と云ふやうな顏をして、顏見合せて嘲笑した。だらしなく木綿の着物を羽織を着ずに着てゐる書生と、頽廢した若い女と、彼等はすつかり自分達の心を見ぬいた心算になるのは當然である。自分は俥夫から見えない處に姿をかくした。さうして自分がC子の手紙で豫期してゐたよりもC子が醜く不快なのを不快に感じた。C子は病氣擧句で顏色が殊にわるかつた。來なければよかつたと云ふ氣もした。しかし自分はあわてて「今出る汽車にのつて江之島にゆきませんか、それともどうします」と云つた。C子はどぎまぎしてゐた。さうして一つ處を見つめてゐる許りで返事をしなかつた。性急な自分ははらはらして來た。「のるならば早くのらなければいけません、のりませうか、江之島でいゝでしよ」と云つた。C子は默つて合點々々をした。自分は少し情けない氣がして來た。しかしすぐ決心して藤澤迄の二等の切符を買つた。さうしてあわててプラツトホームに入つた。C子は息をきつて高下駄であとをついて來た。二等の客車が見えたからすぐのつた。C子もつゞいてのつた。誰も人がゐなかつた。二人は顏見合せて淋しく微笑んだ。

すると驛夫が來た。

「何處へいらつしやるのですか」と云ふ。

「藤澤まで」と云つた。

「藤澤ゆきならばさきの車です、これは神戸ゆきでこのあとにでるのです」と云はれた。二人はあわててオリた。自分は苦笑してゐた。さうして先きの車にのつた。さうしてならんで腰かけた二人は又顏見合せて淋しく微笑んだ。同車の人は皆二人を見た。自分はつとめてC子の兄のやうな顏しようとした。C子の口元の眞似までして見た。しかしそれは駄目だつた。

二人は痩せてゐる。二人は顏色がわるい、二人の顏には雀斑がある、二人は神經質だ、さうして何處か變つてゐる。だから二人は兄妹のやうに思つてくれるだらうと思つた。しかし顏がまるでちがふし、裝の趣味がまるでちがふ、C子は縮緬の道行のやうな被布を着て赤と白の鼻緒のついた高下駄をはいてゐた。自分は冬の鳥打帽をかぶつて、すりへつた駒下駄をはいてゐた。それに第一心に疚しい所があるから駄目だ。さぞ人々は二人をあやしいと思つてゐるだらうと思つた。

しかしそれで自分は反つて大膽になれた。

自分はC子の兄と云ふのが從兄だと云ふこと、それも血のつゞいてゐない從兄らしいと云ふこ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com